



Data

監督: ファン・ドンヒョク
 出演: イ・ピョンホン/キム・ユン
 ソク/パク・ヘイル/コス
 /パク・ヒスン

👁️👁️ みどころ

私は歴史が大好きだから、「文禄の役」と「慶長の役」はもちろん、「鳴梁海戦」もよく知っているが、寡聞にして「丙子の役」は全然知らなかった。“中華システム”の中心が明から清に移ろうとしていた1636年当時、朝鮮王の仁祖は清の臣従に落ち、恥辱に耐えて民を守るの？それとも大義のために死を覚悟で戦うの？

この主戦派 vs 和平派の対立は、日本がポツダム宣言受け入れを巡って何よりもこだわった「国体の維持」の議論と対比すれば、さらに興味深い。

去る6月12日の「米朝首脳会談」以降急速に親密になっている「中朝関係」をみれば、習近平国家主席は“新たな中華システム”の構築を模索中であることは明らかだが、その中で韓国と日本はどうあるべき・・・？



■□■ 「丙子の役」を描いた本作のポイントとは？ ■□■

1636年12月14日から翌1637年1月15日まで47日間続いた、“朝鮮王朝史上最も鮮烈な戦い”が「丙子の役」。本作は、中国大陸が漢民族の明の時代から、満州民族の清の時代に移ろうとする17世紀、清の軍勢12万人に包囲され、孤立無援の“南漢山城”に逃げ込み立てこもった1万3000人の朝鮮朝廷が、“清の臣従に落ち、恥辱に耐えて民を守るのか”それとも、“大義のために死を覚悟で戦うのか”に揺れた47日間を描く映画。いわば、チャールトン・ヘストンが主演した『北京の55日』(63年)のような“時代モノ”“歴史モノ”だが、本作のミソは近時のハリウッド映画や中国映画のように、ド派手な戦闘アクションを売りモノにしていないこと。逆に、本作は吏曹大臣(人事を担当)

であるチェ・ミョンギル（イ・ビョンホン）と、礼曹大臣（外交を担当）であるキム・サンホン（キム・ユンソク）の言葉のやりとり（論争）をメインにしている。

その双方から正反対の意見を聞き、最終的に判断を下す「王さま」は仁祖（インジョ）（パク・ヘイル）。その構造は“裁判モノ”と全く同じだから、本作は裁判員制度ではない“法廷ドラマ”ということもできる。

本作を鑑賞するについては、何よりもまず「丙子の役」という歴史上の事件の勉強が不可欠だが、前述した点にポイントがあることをまずしっかり頭に置く必要がある。

■□■丙子の役とは？秀吉は？明は？清（後金）は？■□■

日本で「関ヶ原の合戦」が起きたのは1600年。その原因や、なぜそれが「天下分け目の戦い」と言われているのか等は、原田真人監督の『関ヶ原』（17年）（『シネマ40』178頁）を観れば明らかだ。それに対して、韓国の時代モノ、歴史モノはテレビの連続ドラマとしていろいろ放映されているが、1392年に高麗に代わって新たに朝鮮王朝を建てた李成桂の名前ぐらいは知っているも、多くの日本人はその歴史には疎い。もっとも、豊臣秀吉が朝鮮に2度にわたって侵攻した文禄の役（1592年）と慶長の役（1597年）はよく知られているし、日本と百済の連合軍が唐と新羅の連合軍と戦って大敗した663年の白村江の戦いも、有名だからよく知られている。しかし、慶長の役で起きた鳴梁海戦について知っている人は少ないだろう。これは、1597年9月16日に、陸軍に呼応して西進した日本水軍と朝鮮水軍の間で起こった海戦で、李舜臣率いるわずか12隻の朝鮮水軍が、毛利高政を「目付」とし、藤堂高虎、加藤嘉明、来島通統らの武将が指揮する330隻もの日本水軍に立ち向かい、圧勝！その戦いぶりは韓国映画『バトル・オーシャン 海上決戦』（14年／原題『鳴梁』）でリアルに描かれているので、機会があれば是非同作を鑑賞されたい。

そう考えると、「丙子の役」について知っている日本人は私を含めてほとんどいないのでは？本作のパンフレットには、①秋月望（明治学院大学名誉教授）の「中華システムと朝鮮王朝」、②康熙奉（作家）の「History 1」「当時の時代背景」「崔鳴吉（チェ・ミョンギル）という人物」「金尚憲（キム・サンホン）という人物」「仁祖（インジョ）という人物」③「History 2」「朝鮮王朝の官僚制度」があるので、これは必読！しっかり「丙子の役」と、それが起きた当時の秀吉と、明、清（後金）の状況について勉強したい。

■□■「主戦論」vs「和平論」 強いのはどっち？■□■

籠城戦は基本的に攻める側がしんどく、守る側が有利。それが古今東西を問わず戦いの常識だ。しかし、それは主に要害の地の利や城壁の堅さにウェイトを置いた議論。攻める側が長期戦を厭わず、守備側の食糧・水に弱点がある場合は話は別だ。日本でも、たとえ

ば楠木正成は千早城にこもって何十倍、何百倍の敵を蹴散らしたが、逆に城攻めの天才であった豊臣秀吉の前に毛利の城は次々と水攻め等の奇策で攻め落とされた。また、難攻不落を誇った天下の名城、小田原城も宴会三昧の総囲み戦術の前にもろくも降伏した。しかして、千早城と同じような山城である南漢山城に立てこもった1万3000人の朝鮮朝廷は、約十倍の清の大軍が囲む中、まずは和平論？それとも主戦論？

そんな場合、誰がどう見ても筋が通っているのは主戦論で、仁祖の前で世子（王子）を人質に差し出すこともやむなし、とする和平論の分が悪いのは当然。口先だけの議論では、「命をかけて戦え！」という勇ましい主張が幅を利かせるのは終戦直前の日本でも同じだった。日本ではとりわけ陸軍がそうだったが、さてその真の実力は？本作で主戦論を主張するのはサンホンだが、ミョンギルとサンホンの上にいる議政府（総理大臣に相当）のヨン・イジョンはサンホンに輪をかけた主戦論者だった。そのため、日本でいえば天皇陛下の前でやる御前会議に相当する仁祖の前の会議では、いつもミョンギルは少数派となり、分が悪かったのは仕方ない。しかも、鍛冶屋のソ・ナルセ（コス）の進言を採用して武器を修理した上で、守御使のイ・シバク（パク・ヒスン）率いる守備兵が城外に出て戦うと大勝利を収めたから、主戦派はますます増長することに。さらに、南の方に残っている近衛兵に仁祖の檄文を送って南漢山城に増援させ、清の大軍を前後から挟み撃ちにすれば朝鮮軍の勝利の可能性もある。そんな希望的観測に対してミョンギルは断固反対し、サンホンとの論争は激烈を極めたが、さあ仁祖の決断は？

『日本のいちばん長い日』（15年）（『シネマ 36』16頁）では、1945年8月15日の玉音放送を巡る暑い1日が描かれたが、ポツダム宣言受諾の可否を巡る日本側最大の争点（こだわり）は国体の維持、つまり天皇制の存続だった。北朝鮮の核兵器の全面廃止を最大のテーマとした6月12日の米朝首脳会談でも、北朝鮮側の最大の要求（こだわり）は、現体制つまり金王朝の維持。南漢山城を包囲する清側の将軍ヨンゴルテが通訳官チョン・ミョンス（チュ・ウジン）を通してミョンギルに対して最初に示した和平案は、仁祖の世子を人質として差し出すこと（だけ）だったから、仁祖が主戦論を排し、その条件さえ呑んでいれば朝鮮王朝は安泰だったのかも・・・。

■この屈辱をどう考える？■

リドリー・スコット監督の『キングダム・オブ・ヘブン』（05年）は12世紀の十字軍の物語で、そのクライマックスは圧倒的迫力で描かれる聖地エルサレムの攻防戦だった（『シネマ 7』34頁）。そこにはさまざまな大道具、小道具が登場したが、本作では圧倒的な飛距離を誇るヨーロッパから持ってきた大砲が登場し、その威力を発揮する。もっとも、それだけですべてカタをつけることはできないようで、結局は城壁にハシゴをかけ、それをよじ登って城内へ侵入できるかどうかポイントになるが、さてその攻防戦は？

他方、南方にいる近衛兵への檄文は届いたの？そして正月15日には予定どおり近衛兵

からのろしは上がるの？そんな“期待”を持ちながらも、ミョンギルだけは逆臣と誇られるのを承知で降伏を薦め、「王様、彼らの言う大義と名分は、いったい何のためですか？ま
ず生きてこそ、大義と名分があるのでは？」との言葉が仁祖の心に突き刺さっていく。1
945年8月15日、日本では 天皇陛下の“玉音放送”がラジオを通じて日本中に流さ
れたが、さて1637年1月15日の仁祖の決断は？

その展開はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいですが、それ以上に目に焼き付け
る必要があるのは、1637年1月30日、南漢山城を出て漢江左岸の三田渡に置かれた
清軍軍営に出向き、清の第2代皇帝ホンタイジに対して仁祖が行った“降伏の礼”の風景
だ。いくら何でもこりゃ屈辱的！もし、太平洋戦争に敗北した日本の天皇陛下が、こんな
“降伏の礼”を連合軍に対して行わなければならなかったとしたら・・・。

■中華システムと朝鮮半島は？本作のそれと今は？■

秋月望（明治学院大学名誉教授）の「中華システムと朝鮮王朝」を読むと、中国の中華
システムなるものの構造がよく見えてくる。ちなみに、ここでは『天』から『天命』をう
けて『天下』を統治する支配者、それが『天子』であり『皇帝』と呼ばれる。これが中華
の理念である。」と書かれている。しかし、そうだとすると、なぜ南漢山城が「天命の城」
なの？という疑問が湧いてくるし、本作の邦題にも少し違和感が生まれてくる。それはと
もかく、中国大陸の王朝は、秦の始皇帝の時代から大きく漢、隋、唐、遼、宋、元、明、
清と変遷してきたが、皇帝をトップとする中華システムは不変で、明から清に中華が移ろ
うとしていた1936～1937年当時も、そのシステムが貫かれていたらしい。そんな
目で見ると、本作ラストで「霸道」がまかり通る結末がよくわかるが、それから約400
年後の今、中華システムと朝鮮半島は？

去る6月12日に開催された史上初の米朝首脳会談では、北朝鮮の非核化が最大のテー
マだったが、その会談の評価は真二つに分かれている。それまで習近平と疎遠だった金
正恩は、米朝首脳会談を契機として頻繁に中国行きを繰り返しているし、習近平は今や北
朝鮮の後見人役として堂々とトランプ大統領と対峙している。トランプ大統領がかけた関
税の脅しなどこ吹く風で、米中貿易戦争はトコトン受けて立ち、決して負けないぞ、と
の姿勢を貫いている。

他方、今も朝鮮戦争が終結しておらず停戦状態にある韓国は、2017年5月に文在寅
大統領が登場したことによって、急速に北朝鮮寄りの政策を押し進めている。そして、2
018年4月の南北首脳会談以降は、それが加速している。その結果、今や北朝鮮 v s 韓
国の対立ではなく、朝鮮半島の統一も目の前・・・？そんな幻想すら広がっている。これ
ぞまさに、2018年仕様の中華システムと朝鮮半島の現状だが、その今後の展開は？そ
して、その中で日本はいかなる立ち位置を取り、いかなる行動をすべきなの・・・？

2018（平成30）年7月2日記